

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(設問に字数制限のある場合は、句読点や符号も一字と数えます。)なお(※)は作問者の注です。

「あれから、下級生たち、何も言ってきてないよな。よかったな」<sup>①</sup>

休み時間、俺は三年二組の教室に行って、山本にそう話しかけた。途中で、けたたましい笑い声で、自分の声がよく聞こえなくなった。教室の後ろのほうで、野球部のキャッチャーの大門が、仲間と笑い転げている。うちのクラスとはずいぶん雰囲気違った。三年四組には、机の上に足を乗せて、ぎゃあぎゃあ騒ぐようなやつらはいない。

「毎日の校内放送やって、春の文化祭やって、秋の体育祭の実況放送で引退する。それで、じゅうぶん忙しいのにさ。コンクールなんてやってたら、受験どころじゃないよな。うちの親が黙ってないよ。後輩たちがあきらめてくれてよかった」

でも、俺はこんな無駄口をたたくただけに、山本のところに来たわけではない。

五月の文化祭について、聞きたいことがあったのだ。

当日、放送部は一日中、校内のアナウンスを担当することになっていく。

野外ステージと体育館でイベントが始まるたびに案内したり、ゴミ捨てなどのマナーを呼びかけたり、音楽を流したりする。

「そろそろシフト(※メンバーへの仕事の割り振り)作らなきゃな。下

決めていたのに。

しかも集合場所は、いつもの理科実験室ではなかった。視聴覚室。ここでやるのは初めてだ。

いつもと座りかたも違った。普段は机を囲むようにしてコの字形に座るのに、今日は山本ひとりが前に立っていて、あとの九人の部員は彼のほうを向いて座る。椅子が固定されているので、向かい合わせにすることができないのだ。

この教室、やっぱよくないよ。後で山本にそう言おうと、俺は心の中で思っていた。一方的に山本の意見を「拜聴(※礼儀正しく聞くこと)」するかたちになって、自分の考えを自由に言えないではないか。特に下級生は。

「今日の議題は、中学生全国放送コンクールについて」

山本がそう言うと、忍がすすつと前へ出て、ホワイトボードに「コンクール」と書いた。

③ どういうことだ。俺は二人の顔を交互に見つめる。

「前回の部会るときに、このコンクールに応募したいという意見がありました。全員参加にするか有志参加にするか、決めたいと思います。じゃないと、地方大会のエントリー(※出場の申し込み)は六月なので。参加するなら早く準備しないと」

部員は全員そろって、それぞれ机に両手を投げ出しながら山本の言葉を聞いている。

すすつと一本の手が挙がった。丸道(※コンクールへの参加を言い出し

級生たちに、都合の悪い時間聞いといてよ。俺、ひまひまにシフト表まとめちゃうから」

それが俺の用件だった。

座っている山本はちらつと顔を上げて、また下を向いた。

あれ、と思った。

いつもなら、助かるよ、じゃあ全部任せちゃってもいいかなあ、と言ってくるのに。

「それともシフト、おまえが作る？」

④ 試しに聞いてみると、山本は上目づかいで見上げてきた。

「俺が作っても、おまえはかまわない？」

「は？ なんだよ。作ってくれるなら、俺は助かるに決まってるだろ。

部長押しつけたお詫びに、俺やんなきゃいけないかな、って思っただけなんだからさ」

明らかにほつとした様子で、山本はうなずいた。

「うん、だったら作るから。部長なのに、あんま人に任しちゃいけないなと思ってる」

② 「あ、そう。じゃあ、よろしくな。なんかあったら聞いてな」

② 何かがおかしい。

その違和感は、翌日、ますます濃いものになった。

「今日の放課後、臨時部会やるって」

なぜか忍(※中三の放送部員)から、そのことを聞かされた。いつもだったら、いつ臨時部会をやるか、どんな内容にするかは俺が実質的に

た中一の放送部員)だった。

「ボクは I 参加がいいと思います。そんなに人数多くないから、みんな協力して番組作りをしたほうがいいと思うからです。校内放送はたいした感謝もされないで過ぎていってしまうけど、コンクールに応募する作品は、すごく想い出になると思うんで。先輩たちは、秋の体育祭を引退の目標にしてるって、聞いたことあるんですけど、それよりこっちのコンクールのほうがよくないですかあ？」

④ 俺は自分でも目つきが険しくなるのがわかった。なぜ、後輩に俺たちの目標を勝手に変更されなくてはならないのだ。

「どうかな、他の人は」

挙手した。

「伊集院」

山本が、俺の名字を改まった声で呼んだ。

「俺は、II 参加がいい。コンクールっていうのは、降って湧いた話で、俺たちがどういうふうに関わるかっていうのは、一年、二年かけてゆっくり決めてもいいんじゃないかな。そういう意味でも、今回はやりたい人が参加して、やりたい人が大会を偵察しに行って、そんな感じがいいと思う」

親の顔が目に見えかぶ。

コンクールってなんだそれ。やっぱり運動部並みの忙しさじゃないか。それに、夏休み前に退部するっていうのが、一般的な中三じゃないのか？ おまえが目指してる私立高校の倍率、知ってるだろうな？ 中学受験な

らまだしも、高校受験で入るのは大変なんだからな。

「じゃあ、有志参加になったら、伊集院はどうするの」

父の怒鳴り声まで、脳内で再現できた。そしてよみがえってくる。中学受験に失敗したときのこと。俺は、ひどい下痢を伴う風邪をひいてしまった。本命一校だけを受験することになっていたのだが、その当日、家から出ることをさえできなかった。

「俺はパス。陰ながら、参加する人たちを応援しているよ」

「了解。他の人の意見は」

山本が拳手を促し続けている。

「はい、七子（※中二の放送部員）」

「あたしも Ⅲ 参加がいいと思います」

そんな声が聞こえて、俺は思わず顔をそちらに向けた。やはり、本気でやりたがっているのは、丸道だけだったんじゃないか。

「でも、理由は伊集院先輩とは違います。あたしは逆に、やる気のない人が無理やり参加してもいいものは作れないから、かえって迷惑、ってことを言いたいんです。熱意のある人たちだけでやりたい」

あ……俺はようやく自分の立場に気づいた。あまりにも迂闊（※注意が足りないさま）だった。誰からも悪口を言われなくてやり過ぎしてきたことで、そんなことはあるはずないと、思いこんでいた。人間関係の計算に狂いが生じるとは。よりによって、後輩から「外される」なんて。

山本は口をへの字気味に曲げながら困った顔で、訥々と（※言いにくそうにしながら）結論を述べた。

指がふるえてきそうになって、俺は机の下に両手を隠した。

なるほど、俺は、部内の和平にまで貢献してしまった。最上級生になっても喧々（※やかましく）いがみ合うであろうと思われるいた七子と綾部が、いとも簡単に和解した。対立したい共通の相手ができたから。

その後、始まった会議については断片的にしか記憶していない。最後に丸道が、「主催者のホームページに昨年の入賞作品の動画が掲載されているので、来週までに各自見ておきましょう」というようなことを言い、解散になった。そしてコンクール対策会議、というのがこれから毎週土曜日に開かれることに決定した。俺は、その日、塾があるから行けない。

終わるや否や、立ち上がって視聴覚室を出た。誰もついてこなかった。ドアを閉める直前、笑い声が聞こえてきた。

たまたまなのか、俺を嗤（わら）って（※ばかにして）いたのかはわからない。コンクールは、俺とは無関係なところで始まった。もちろん、全国大会出場、などというミラクル（※奇跡）はなく、県大会での入賞もなく、静かに幕を閉じた。しかし、山本と綾部がふざけ合っているのを見たり、忍と七子がいっしょに廊下を歩いているところに出くわしたり、俺以外の九人の距離がぐっと縮まっているのを感じていた。

だとしても、もう別にかまわない。二学期が始まった。来月の体育祭が終われば、俺たち三人は引退だ。

（吉野万理子『時速47メートルの疾走』による）

「じゃあ、ひとりでも反対があった時点で、全員参加は成立しないと思うから、有志参加で。今日、この後、さっそく第一回の会議をやるうと思うので、有志参加したい人はこの場に残ってください」

山本までもがいつの間にか「あちら側」に行ってしまった。偶然とは思えなかった。誰がどう発言して、俺がそれにどう反応するかを想像し、次に誰がどう発言して、とすべては仕組まれていた気がする。

さっきのは一般論で、実は興味あって、と言おうにも「**⑥**」と言い放ってしまった。

「じゃあ、さっそく第一回会議をやるうか。司会は誰かに譲っていいかな。七子？」

山本は進行役を二年生に譲って、着席している。しかし、呼ばれた七子も忍も、他の二年も一年も動かない。彼らの視線は俺に刺さってきた。この場を、たったひとり出ていけ、と言うのか。そうはさせない。

俺は笑みを浮かべた。

「せっかくだから、見学させてもらおうかな。オブザーバー的な（※第三者の立場から成り行きを見守り、必要なら意見を述べる人のような）感じで」

「オブザーバーとか、別にいらんすけどねえ」

七子がぐすりと笑った。そしてそんな彼女と目を合わせて、綾部（※中二の放送部員）が言った。

「ムリじゃなくていいんですよ、先輩」

「別にムリとかじゃなくて」

問一——線①「よかったな」とありますが、この内容を具体的に表した次の文の **□** にあてはまることばを、文中から指定の字数で書きぬきなさい。

中学生全国放送コンクールに応募することを、**（十三字）**よかったですということ。

問二——線②「何かがおかしい」とありますが、「俺」がこのように感じたのはなぜですか。その理由を述べた次の文の **A**・**B** にあてはまることばを、それぞれ十字程度で答えなさい。ただし、**A**・**B**ともに「仕事」ということばを必ず使うこと。

いつもは素直に、**A** と言う山本が、今日は「俺」の様子をうかがいながら、**B** と言ったから。

問三——線③「俺は二人の顔を交互に見つめる」とありますが、このときの「俺」の思いとして最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 今まで臨時部会の日時や内容は自分が決めていたが、今回は山本と忍が勝手に決めてしまったので、二人に対して怒っている。  
イ ふだんの部会とは場所も座り方も違い、意見も言にくいので、二人に教室を変える助言をしようとタイミングを見計らっている。

ウ 山本が、自分ではなく忍に相談をもちかけていたことがわかり、これまで支えてきた友情が裏切られたと感じて悲しんでいる。  
エ 不参加という結論で終わったと思っていたコンクールが今日の議題に取り上げられているのでわけがわからず、とまどっている。

問四

Ⅰ Ⅱ Ⅲ に入ることばの組み合わせとして最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア I 全員 II 有志 III 全員  
イ I 有志 II 全員 III 全員  
ウ I 全員 II 有志 III 有志  
エ I 有志 II 全員 III 有志

問五

線④「俺は自分でも目つきが険しくなるのがわかった」とありますが、このときの「俺」の心情を表すことばを、次のア～オから二つ選び、記号で答えなさい。

- ア いらだち イ 期待 ウ さびしさ  
エ 失望 オ 腹立たしさ

問六

線⑤「人間関係の計算に狂いが生じるとは」とありますが、「俺」がこのように思ったのはなぜですか。その理由として最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 後輩たちのためを思って、あえて異なる意見を言ってきたのに、

問九

線⑧「指がふるえてきそうになって、俺は机の下に両手を隠した」とありますが、ここには「俺」のどのような思いが表されていますか。その説明として最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 下級生に主役の座を譲ることで部内の対立を収めようとしたが、うまくいかず、かえって同情されたくやしさを隠そうとしている。  
イ 後輩からの予想外の反発におどろいたものの、自分はその程度では負けないことを示そうと、ふだん通りの態度をとろうとしている。

ウ 裏方としてみんなを支えるという自分の真意が伝わらないのが残念で、どのように言えば伝わるか、必死で考えようとしている。  
エ 新たな言葉を持ち出してその場を切りぬけようとしたが、その身勝手さも見ぬかれ、動揺している姿を必死で隠そうとしている。

問十

線⑨「対立したい共通の相手」とありますが、それはだれを指していますか。文中から五字で書きぬきなさい。

そのために部内の和を乱す張本人だと思われてしまったから。

イ 誰からも非難されないよう、注意してふるまってきたつもりなのに、いつの間にか自分ひとり仲間はずれにされていたから。

ウ 放送部の活動にこつこつと取り組んできたつもりなのに、結局は下級生たちの自分勝手な計画に利用されただけだったから。

エ 受験勉強と部活動を両立させるため自分なりにがんばってきたのに、他の部員たちからはやる気のない人だと見られていたから。

問七

⑥にあてはまることばを、文中から四字で書きぬきなさい。

問八

線⑦「彼らの視線は俺に刺さってきた」とありますが、このときの「彼ら」の思いはどのようなものでしたか。その説明として最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア コンクール参加に乗り気でない伊集院が出ていったあと、自分たちの思うように会議を進めたいという思い。

イ 今からでも伊集院が自分の非を認め、みんなに謝ってくれたら、また仲間として迎えたいという思い。

ウ 受験のため、ひと足早く引退する伊集院に同情しながらも、新たな目標に早く取り組みたいという思い。

エ たとえ参加はしなくても、伊集院から山本へ、アドバイスやげましとなる言葉を送ってほしいという思い。

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(設問に字数制限のある場合は、句読点や符号も一字と数えます。)なお(※ )は作問者の注です。

ベーシスト(※ベースという楽器をひく人。筆者と共に音楽活動をするためアメリカから日本に来ている)にとって、日本の本格的な寿司店に入るのは初めてのこと。カウンター席に座った彼はなにを注文しているかわからず、ガラスの保冷ケースに入った寿司ネタをおおずと指さします。ボクはいちいち、それはカンパチというんだよ、それはハマチ、それはサバ、それはアジ、といった具合に魚の名前を言っていました。彼はずいぶんと食べました。回転寿司ではないので大奮発です。でも、「おいしい」と日本語で連発してくれたので、こちらの気分も盛り上がりました。ところが、寿司店を出てしばらく歩いてから、ベーシストはいきなりこう言ったのです。

「なんで日本人は、① なんだよ?」

ボクは「え?」と聞き返しました。その時の彼の反応がこうです。

「フィッシュ・イズ・フィッシュ(魚は魚だろ)」

次回からは回転寿司でいいやと思いましたが、つまり彼は、寿司ダネの区別がついていなかったのです。魚は魚でしかなかったのです。

たしかに、アメリカ人は日本人ほど魚の種類を知りません。ニューヨークの寿司レストランでも、経営者が日本人でない場合は、カンパチやハマチやツムブリを一緒にイエローテール、マグロもカツオもまとめ

とってはたった一種類の怒りしか存在しないことになります。逆に、揺れ動く心に対して百の描写ができるなら、その人はそれだけの心の姿の区別がつくのです。

言語とはすなわち、区別がつくかどうか。差異に根ざした表現なのです。

言葉とは差異に根ざした表現である。

これは言語学の父と呼ばれるフェルディナン・ド・ソシュール(一八五七—一九一三)が、言葉が存在することの根本理由を明かしていくなかでたどりついた答えです。

ソシュールは、二十一歳という年齢で「インドヨーロッパ語」という壮大な体系があることを各国の母音の分析によって解き明かした天才です。

言語学の分野に慧星のように現れ、なおかつ言語学そのものを世界的レベルで打ち立てたこのスイス人は、続いて一般言語学にターゲット(※力を注ぐ対象)を定めました。各国の言葉の成り立ちではなく、言語そのものに対する探究を始めたのです。たとえばボくら日本人は、だれかが「すずめ」と発声すればみな一応にそれぞれの頭のなかで「すずめ」を思い浮かべることができません。それぞれの「すずめ」の動的イメージは違うでしょうが、まず間違いなくそれは「すずめ」であって、「めじろ」や「うぐいす」ではないはずなのです。

このシンプル(※簡単、単純)な共有認識はいったいどういう理屈か

② ツナと言っている店がほとんどです。多くのアメリカ人にとっては、イエローテールという魚は存在しても、カンパチやハマチは存在しないのです。ましてやそのハマチが成長具合によってワラサやブリと名が変わる出世魚だなんて、説明したところで「?」という表情になるだけです。

日本人は生き物の名前を細かく知っていると一点で、おそらく世界の民族ではないでしょうか。魚の名前もそうですし、虫の名前や花の名前もそうです。ちなみにこのベーシストは東部の名門大学の生物学科を卒業していますが、カブトムシもクワガタムシもカミキリムシも全部まとめてビートルと言います。区別をつけないのです。

日本のように虫や魚を愛する伝統がない欧米では、虫に対して二、三の言葉しか浮かばない人が一般的です。「昆虫記」のジャン・アンリ・ファブールがフランス本国では必ずしも有名人ではないように、虫に対する情熱を他国で探すのはなかなか難しいことなのです。

このベーシストの一件は、言葉とはなにか? という問いかけに対して、ほとんど答えにも近いようなヒントを与えてくれているように思います。

人間は区別がつかないものに対しては、呼び名を持ち得ません。区別がついている事象に対してのみ、呼び名を持つのです。

その考えをあてはめると、感情に対して三つの言葉しか持てない人は、三つの感情しか区別がついていないと言えます。嫌悪(※ひどくきらいこと)の感情が全部「むかつく」になってしまうのであれば、その人に

ら成り立つのか? 一言語からなる民族はなぜ言葉とイメージを共通に持てるのか? というのが一般言語学の解き明かそうとする方向性です。その結果、ソシュールが突き止めた言葉の正体。

それはベーシストの寿司の一件でも明らかになった、認識上の差異というものでした。

わかりやすい例をあげましょう。I あなたが雪の積もった原野を旅していて、その雪面に対してなんらかの表現をこころみようとした時、どんな言葉が出てくるでしょうか。思いつくところで、「白い」「冷たそう」「かたそう」「まぶしい」といったところではないでしょうか。

II、雪とともに暮らすイヌイットには、その表層の呼び方だけで幾十もの言葉があると言われています。III 彼らは、雪質や気温や風によって微妙に変わる雪原の見え方、その区別がつくからです。

区別がつく。そこに差異がある。IV 言葉が生まれるのです。

日本には、雨に対する呼び名がたくさんありますね。「霧雨」「こぬか雨」「にわか雨」「五月雨」「お天気雨」「夕立」「通り雨」「ゲリラ豪雨」といったふうです。雨が多く、四季に恵まれた国土だけに、ボくらはその区別がつくのです。だからこれだけの呼び名が生まれました。では、欧米ではどうでしょう。たとえばカリフォルニアやニューメキシコ(※いずれも米国南西部の州で雨が少ない地域)で「雨の表現はいくつありますか?」と訊いても、それはあまり意味をなさない問いになるはずです。まったくもって、あちらでは雨は雨でしかありません。せいぜいが「ヘヴィー・レイン(激しい雨)」や「シャワー(にわか雨)」といった

程度。言い方はありますが、雨に対する細分化がない土地では、その言葉数もぐっと減るのです。

宮沢賢治が雲をどう表現しているか。かつて草野心平(※詩人)がそれをまとめたことがありました。ここではこし引用しますと、「氷河が海にはいるように白い雲のたくさん流れは枯れた野原に注いでいる」「向うの縮れた亜鉛(※銀白色の金属)の雲へ」「雲はたよりのないカルボン酸(※炭素をふくむ化合物)」「雲には白いとこも黒いとこもあってみんなざらざら湧いている」「白い輝雲のあちこちがぎれて、あの永久の海蒼(※海のような青い色)がのぞいている」「雲はみんなリチウムの赤い焔をあげる」「雲の累帯構造(※縞を積み重ねたようなつくり)の継ぎ目から一切れのぞく天の青」「燃え上がる雲の銅粉」「日はいま羊毛の雲に入ろうとして」「やまなしの匂いの雲」「蛋白質の雲は遙かにたえ」「蒼鉛色(※赤みを帯びた銀白色)の暗い雲からみぞれはびちよびちよ沈んでくる」……ああ、もう、詩人の目にはどれだけの種類の雲が現れたのでしょうか。おそらく宮沢賢治にとっては、目にする雲はすべて違う雲であって、それは一回性の命との出会いでもありました。すべてに差異があり、だからこそそれぞれの形容になったのです。一般の人はしかし、いわし雲と入道雲程度の区別はついたとしても、ここまではいかないでしょう。まさに、差異がわかることが言葉を生むみなもとのわけです。

では、差異は初めから対象に用意されているものなのでしょうか。そうだとも言えるし、そうではないとも言えそうです。これもまた、

の部分からです。一見、言葉はものへの「対応」にその由来を持っているようなイメージですが、もっとも根本的なところは認識上の「違い」であり「差異」であつたのです。

たいていの場合、ボクらは日々の経験を通じて言葉を覚えてきました。幼児から少年期にもっとも多くの言葉を覚えますから、ものを初めて見る、差異を知る、言葉を知って認識できるようになる、という受け身の姿勢での吸収がほとんどです。しかし、理科や社会の教科書を読んで勉強する時のように、言葉がまずきっかけになって差異を理解していくというパターンもあります。モンシロチョウという名だけを知り、あとで図鑑を開くタイプですね。これもまた、言葉の森の木々を増やしていくひとつの方法なのです。

ボクらの胸にある言葉の森は、さまざまな経験によって一本ずつ木々が増え、徐々に大きくなってきたものです。

(ドリアン助川『プチ革命 言葉の森を育てよう』による。  
文章を一部省略し、表記を改めています)

問一 ① に入る文として最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア わざわざ魚を料理する
- イ 魚にいちいち名前をつける
- ウ 次から次へと魚を食べる
- エ 魚が一番おいしいと思う

ボクらの内側が「差異がある」と、とらえられるかどうかにかかっているようなのです。

たとえば、並木を考えてみて下さい。あなたの家のそばにも並木はありますよね。ケヤキやサクラのように、樹木の名ぐらいはあなたにもわかると思います。でも、それ以上のことになるとどうでしょう。あなたは毎朝、何本の木に出会いますか？ そのそれぞれの区別がつかますか？ たとえば並木の一本だけを取り出したとして、それがどこに植えられていた木なのかわかるでしょうか。

おそらくは「いいえ」という答えが返ってくるでしょう。並木全体は認識できても、その一本ずつは区別してはいないはず。すべての木は形が違うのに、差異をとらえられていない。物体としての分け隔てがないのです。独立していない。だから一本ずつに対しては呼び名もない。

しかし、これが並木ではなく、人間だったらどうでしょう。木の代わりに人が立っていたら？ いえ、そこまで考えなくても、入学や転校で新しい仲間たちと出会った時のことを思い出して下さい。どうですか。何十人、あるいは何百人もの新しい仲間たちが現われた時、最初はだれがだれだと区別がつかみませんから、当然、名前も覚えられません。しかし、数ヶ月もすれば、すくなくともクラス全員の名前ぐらいはわかるようになるものです。それは等しく、全員の差異がわかるようになったからだとも言えるのです。

周囲のものや事象、それぞれに対する差異の発見。それが形状からくるものであれ、性質からくるものであれ、言葉が誕生したのはまさにそ

問二 線②「イエローテール」という魚は存在しても、カンパチやハマチは存在しない」とありますが、これはどういう意味ですか。

その説明として最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア カンパチとハマチが違う魚であることは理解されているが、イエローテールという呼び名のほうが言いやすいということ。
- イ アメリカではカンパチやハマチを食べる習慣はないが、イエローテールなら寿司にして食べる習慣が広まっているということ。
- ウ カンパチとハマチを見分ける基準がなく、どちらもイエローテールという同じ種類の魚だと認識しているということ。
- エ カンパチもハマチもアメリカ近海ではあまりとれないが、イエローテールはよくとれるので見慣れているということ。

問三 線③「言語そのものに対する探究」とありますが、その内容を説明した次の文の□にあてはまることばを文中から指定の字数で探し、書きぬきなさい。

一つの言語を用いる民族は、なぜ(十四字)のかを解き明かそうとするもの。

問四 I、IV に入ることばの組み合わせとして最も適当な

ものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア I なぜなら II しかし III たとえば IV だから  
 イ I たとえば II なぜなら III しかし IV だから  
 ウ I なぜなら II だから III たとえば IV しかし  
 エ I たとえば II しかし III なぜなら IV だから

問五 線④「雨に対する細分化」とありますが、このことを具体的に表しているひと続きの二文を文中から探し、その最初と最後の五字を書きぬきなさい。

- 問六 線⑤「すべてに差異があり、だからこそそれぞれの形容になったのです」とありますが、これはどういうことですか。その説明として最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。  
 ア 宮沢賢治は、目にする雲の一つ一つを、それぞれ他とは異なる別々の雲ととらえて、違う言葉で表現しているということ。  
 イ 宮沢賢治は、たとえ目の前に現れる色や形がそれぞれ異なっても、すべて雲に違いないと感じているということ。  
 ウ 宮沢賢治は、詩人として、同じ一つの雲をどれだけたくさん異なる言葉で表現できるかを考え続けたということ。  
 エ 宮沢賢治は、雲のくわしい区別を、できるだけわかりやすく一般の人々に伝えるための方法を見つけたということ。

問七 線⑥「物体としての分け隔てがないのです」とありますが、

この具体的な内容を表した次の文の□にあてはまることばを文中から指定の字数で探し、その最初と最後の五字を書きぬきなさい。  
 ケヤキやサクラの並木を見ているとき、□(二十六字)ということ。

- 問八 線⑦「これもまた」とありますが、「これ」にあてはまる例として最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。  
 ア 幼児が、目の前を飛んでいくチョウを見て指さすと、おとなが、「あれはモンシロチョウというんだよ」と教えてくれる。  
 イ 「モンシロチョウ」という言葉を初めて聞き、それがどういふものかを調べて、アゲハチョウやモンキチョウとの違いを知る。  
 ウ 保育園の庭で花にとまったチョウを見ているとき、友だちが「あ、モンシロチョウがいる」と大きな声を上げる。  
 エ 絵本を広げると、モンシロチョウと菜の花畑の絵があり、「春の畑にモンシロチョウがやってきました」と書いてある。

問九 「言葉とは何か？」という問いについての答えとなるように、次の文の A B C に入る二字の熟語を文中から探し、それぞれ書きぬきなさい。

- A によって B される C に対して与えられるもの。

3

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(設問に字数制限のある場合は、句読点や符号も一字と数えます。)なお(※)は作問者の注です。また、筆者の石井桃子氏は埼玉県の出身です。

戦争がおわった。何もかも逆になった。もと町会長が小さくなって街を歩き、アメリカ軍人家族の自動車が三宅家の前に横づけになったりした。英語のできる人はひっぱりだこだったから、マミー(※三宅夫人。順ちゃん之母。アメリカ生まれの二世)は女中さんを雇って、働きに出るだろうと、家では話した。ところが、そのけはいもなかった。ただ一時、マミーはアメリカ軍人の家族にお花を教えはじめた。が、その時もお礼をお金でなく食糧でもらったのは、ちょうど私の父が、病みはじめたからにちがいないと、母は推量した。とにかく、マミーは、裏口からやってきては、バター(※バターのこと)だのお砂糖だの、有無を言わせず、おいていってしまうのだった。

それから三年、私たちは、三宅家の人たちに支えられて生きてきたみたいだ。第一に、私の父が亡くなった。その後二年で、姉が学校を卒業したら、がっくりしたように、母も父のあとから逝った(※亡くなった)。私たちは二人になった。幸い姉は、マミーにしこまれて、英語もタイプ(※タイプライター)もできたから、すぐ仕事が見つかった。そこで、家の一部を人に貸し、私は小学校から帰ると、夕方まで三宅家にあずけられるという生活の設計も、マミーと姉の間でたてられた。  
 戦後のひどいところを通して、また三宅家はアメリカに渡った。マミーや私の「理想の男性」順ちゃんを乗せた船がだんだん遠ざかっていくの

を、十二の私は、泣いて見送った。

すぐ帰るといって、家も売らずにいったのに、それから九年、三宅家は帰ってこなかった。順ちゃんは、大学を出て、ダイー(※順ちゃんの父)の関係している日本の貿易会社に入っていた。だから、今度の東京転勤になるというたよりに、私たちは歓声をあげた。

〈中略〉

ジリジリする二十分がすぎて、検査のすんだ四、五人が出てきたが、その中に順ちゃんがいた! まあ、ダイーにそっくり、と私は思った。順ちゃんは、階段をかけあがってくると、そこに立ちならぶ人垣にざっと目をさらし(※すみずみまで見て)、笑顔でまっすぐ私のところへやってきて、

「ヤス! ……」  
 「あら、あたし、とも子よ!」私は、ぎょうてんして言った。私の耳にも、私の声が悲鳴にきこえた。

順ちゃんは、正直にぱくっと口をあけ、  
 「え、とも子こんなに大きくなったの!」というまに、順ちゃんの目は、私のななめうしろに立っている、ひつつめ髪(※簡単に結った女性の髪形)のおねえさんをさがしあてていた。

「ヤス!」順ちゃんは、私のわきをすりぬけて、おねえさんの手をとっていた。  
 みるみるうちに、おねえさんの目に、涙がいっぱいにたまった。

(石井桃子「春のあらし」(『においのカゴ』所収)より)

問一 線①「の」と同じ働きをしているものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 去年会ったのを覚えていますか。
- イ 山のふもとに大きな湖がありました。
- ウ 入会の手続きをすませてください。
- エ 運動の苦手な人でも楽しめるスポーツです。

問二 線②「推量」と同じ組み立ての熟語を、次のア～オからすべて選び、記号で答えなさい。

- ア 苦楽 イ 過去 ウ 読書 エ 国立 オ 満足

問三 線③「有無を言わず」ということばの使い方として正しいものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 父は有無を言わず、母を医者に行かせた。
- イ 先日問い合わせたが、有無を言わず返事が来ない。
- ウ 帰宅した弟は、有無を言わず泣くばかりだった。
- エ 先生の話をも、みんなは有無を言わず聞いた。

問四 線④「ぎょうてんして」の意味として誤っているものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア びっくりして イ たまげて
- ウ あわてて エ おどろいて

問五 線⑤「みるみるうちに」がかかることばを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア おねえさんの イ 目に ウ 涙が
- エ いっぱいに オ たまった

**4** 次の問いに答えなさい。

問一 次の①～③の文の（ ）に最もよくあてはまることばを、後のア～オから選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ① 木下さんは先生の質問に（ ）答えた。
- ② 村山さんは会場から（ ）と立ち去った。
- ③ 田中さんの絵は展覧会で（ ）目立った。
- ア そそくさ イ すかさず ウ あながち
- エ ひときわ オ しきりに

問二 次の①・②の文の 線部を、敬語を使った表現に直すとき、正しいことばを後のア～オから選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ① それではどうぞ食べてください。
- ② 父がくれぐれもよろしくと言っておりました。
- ア 申して イ おっしゃって ウ いただいて
- エ いらっしゃって オ めしあがって

**5** 次の①～⑤が、体の部分を表すことばを用いた慣用句になるように、にあてはまる漢字一字をそれぞれ答えなさい。

- ①  にどろをぬる
- ②  に衣着せぬ

- ③ のどから  が出る
- ④  を皿にする
- ⑤ 後ろ  をさされる

**6** 次の①～⑩の文の 線部について、漢字は読みをひらがなで、カタカナは漢字に直して答えなさい。

- ① 細心の注意をはらう。
- ② 先日の試合で足を負傷した。
- ③ 妹は元来おとなしい性格だ。
- ④ 人を敬う気持ちを養う。
- ⑤ 予定を変えて直ちに出發する。
- ⑥ ケイトウ立てて説明する。
- ⑦ 親切なもてなしにカンゲキする。
- ⑧ せっかくの努力がトロウに終わる。
- ⑨ 新しい法律がコウフされた。
- ⑩ 友人と十年ぶりにサイカイする。

【問題は、ここで終わりです】

